

寺町 花しょうぶ園のあゆみ

当園は、元々ふけ田で稲作だけの水田でした。牛で耕作した時代は、とても美味しい、お米が収穫されていましたが、機械化となり稲作をしなくなっていました。

平成19年に開催された国民文化祭で寺町（安楽寺）での能舞台のイベントに合わせ、休耕田を活かして、来訪者を迎えようと検討したのが最初で、ふけ田を活かした「花しょうぶ園づくり」計画がスタートしました。現在、26.6アールの敷地に約5,000本の花しょうぶを、私たち「郡里島保全会」のメンバーを中心に育てています。

郡里島保全会

花菖蒲の発達歴史

花菖蒲の観賞は、約800年前から始まったと言われていますが、栽培が行われた記録は江戸時代の1660年代で、尾張藩主・徳川光友（みつとも）が植えて観賞したというのが初めてのようです。

最も花菖蒲の改良に貢献したのは幕府の旗本・松平菖翁（しょうおう）で、各地から野生の花菖蒲の変わ咲きを集め、苦心して交配を続け、今日に残る多くの名花を作りました。このような武士階級の園芸趣味の流行が一般庶民にまで移り、江戸を中心に発達した花菖蒲が江戸花菖蒲と呼ばれます。

松平菖翁より花菖蒲を分与された肥後藩主・細川斉護（なりもり）が治め、肥後藩の愛好者たちによって改良され、今日に至ったものが肥後花菖蒲と言われています。

一方、伊勢の紀州藩士・吉井定五郎によつて、三弁咲きで、伊勢花菖蒲と呼ばれた品種群が出来上りました。また、明治初年に始まった花菖蒲の米国輸出により、江戸、肥後系をもとにアメリカ系花菖蒲と呼びたいです。

